

松村 秩氏を偲んで

福屋靖子（法政大学現代福祉学部）

人生の大半を理学療法士界に捧げられ、これからご自分の人生をという時の早過ぎたご逝去はどんなにか心残りであったことか、とりわけご家族を思うと心痛の極みである。

松村 秩氏はわが国理学療法士界の第一人者であり、日本理学療法士協会の創設者の一人である。理学療法士の身分は、リハビリテーション医療の必要性を訴え続けた篤志家医師達の努力を背景に昭和 40 年に発足したが、松村氏は米国人教師による国際的レベルの教育を受けた東京病院附属リハビリテーション学院の第一期生であった。私が松村氏に出会った最初は勤務先の東大病院である。当時ローソン氏が指導教員として派遣されており、彼は実習生の中で最も印象に残っている学生であった。実直・真摯で実行力のある学生という印象で、額に汗して患者と対している姿が目に残り続けている。その後、当時唯一の専門誌であった「理学療法と作業療法」の編集委員会や彼が協会長となった理事会などで一緒に仕事をする機会に恵まれた。

制度化されたとはいえまだ実態のないわが国の理学療法や専門家集団としての協会において、松村氏は嵐の海の羅針盤の役割を果たした人物である。つまり、協会の方向に一定の道筋が定まるまでの孤高の戦いは、周囲には計りしれないほどの試練であったものと推測される。松村氏はプロとしての揺るがぬアイデンティティを持ち、それをわが国に根付かせる強い使命感のもとで努力され、昭和 56 年には世界理学療法連盟の常任理事国として承認されるという快挙を協会長として成し遂げた。この困難な課題を乗り越え土台をつくり後輩にバトンタッチできたのは、彼の誠実な人柄と忍耐力に負っており、彼の功績がなければ理学療法士の現在は無かったと確信している。

われわれは決して忘れてはならない彼の功績に感謝し、それに報いるべく社会貢献できる理学療法を目指していくことを誓いたい。

「松村さん、本当にありがとうございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。」



（ご略歴）

- 昭和 7 年 3 月 17 日生
- 昭和 35 年 3 月 立命館大学文学部史学科卒業
- 昭和 41 年 3 月 国立療養所東京病院附属リハビリテーション学院理学療法学科卒業
- 昭和 41 年 5 月 理学療法士免許取得 第 10004
- 昭和 43 年 6 月 ボストン大学大学院理学療法学科修了
- 昭和 41 年 4 月 国立療養所東京病院附属リハビリテーション学院理学療法学科教官（昭和 45 年 2 月～48 年同学部長）
- 昭和 48 年 5 月 東京都養育院附属病院リハビリテーション部主任技術員
- 昭和 53 年 9 月 同理学療法科長（昭和 61 年 3 月まで）
- 昭和 58 年 6 月 同作業療法科長兼務（昭和 61 年 3 月まで）
- 昭和 61 年 4 月 東京都立医療技術短期大学理学療法学科教授（平成 5 年 7 月～7 年 3 月同学科長）
- 平成 7 年 4 月 茨城県立医療大学保健医療学部理学療法学科教授（平成 11 年 4 月～13 年 3 月同学科長）
- 平成 13 年 4 月 日本工学院専門学校医療学部参与
- 平成 14 年 7 月 13 日 ご逝去（享年 70 歳）

（社会的活動）

日本理学療法士協会創立に参与（昭和 41 年）/日本理学療法士協会会長（昭和 46 年まで 1 期、昭和 49～平成元年）/協定機関誌「理学療法と作業療法」編集委員（昭和 42 年～）/理学療法士・作業療法士国家試験委員（昭和 45～55 年）/国際理学療法連盟理事としての日本代表委員（昭和 49 年）/日本義肢装具研究会理事（昭和 53～60 年）/厚生省医療関係者審議会委員に理学療法士として初めて就任（昭和 55 年）/国際リハビリテーション交流セミナー委員会委員（昭和 56 年）/日本義肢装具学会理事（昭和 60～平成 4 年）/中華人民共和国身体障害者リハビリテーションセンターへ JICA から派遣（昭和 62 年）/第 3 回アジア理学療法学会・総会学会長（昭和 63 年）/厚生大臣表彰（国民医療の向上、昭和 61 年）

業績 『ねたきり老人の介助』（医歯薬出版、1982 年）、『やさしい老人のリハビリテーション』（中央法規出版、1984 年）など著書多数